

Dear地球民

第8号

1992年5月発行

編集発行 ゆがわら国際交流協会

☎259-03 神奈川県足柄下郡湯河原町土肥1-7-1

湯河原町商工会内 ☎0465-63-0111

盛況だった → → ❌❌❌ 国際理解講座 ❌❌❌

魅惑の国「タイ」の今日この頃

< 講師 > アド・スタッフ 代表 石水 裕 氏

去る3月26日(木)午後7時30分より湯河原町商工会館3階大会議室において、当協会会員でもある総合広告代理店アド・スタッフ代表石水裕氏を講師に招き、茶菓子を食べながら、テーブルを囲んでの国際理解講座を開催した。題して、『魅惑の国「タイ」の今日この頃』。そして、副題は『タイの人々の生活と文化』であった。

石水氏と当協会との出会いは、昨年夏、やっさ国際交流事業でのホスト受け入れの申し込みであった。当時、男子学生の受け入れホストが不足しており、当協会として強く受け入れを勧めたが氏は「タイ人」にこだわり、昨年はタイの学生が不参加だったため、結局、ホストの受け入れは実現されなかった。しかし、これがキッカケで当協会に入会していただき、当協会との付き合いが始まった。タイ以外の国は興味がないと言う程タイに没頭している氏だからこそ、今回の講演が実現されたものと思う。

講演会開催当日は町会議員選挙直後だけに出席者は少ないだろうと椅子を30席用意したが、参加者38名を数え、椅子やテーブル、茶菓子の補充でスタッフは大忙しであった。

講演会開始前、氏の用意したテープでタイの民族音楽を流し、ムードを高めたところで、氏とタイとの巡り会い、大きな地図を示しながらタイの基本概念、タイ語の面白さ、タイ人の性格など面白おかしく話が進められて行った。そして、長年撮り続けた写真をスライドで映写しながら、風景は勿論、タイの人々、食べ物、上流階級の家庭や家屋の内外、貧民街やそこに住む人々、彼らの生活など観光旅行では見られないタイの裏の世界をこと細

(次頁へ)

かに説明を加えながら、スライドは進んで行った。氏はまた、衣類、装飾品、食器、そして雑誌など、多くの品々を持参し、それらを出席者が回し見をし、ため息をついたり、しかめっ面をしたり、笑いが出たりで、多くの知らない世界を垣間見た感嘆の空気が会場に流れて行った。特に、貧困から少女たちが売春に身を売らなければならない背景、エイズの蔓延とその恐怖のくだりに話が進むと、会場はシーンと水を打ったように静まり返ってしまった。

一般に講演会に参加して、居眠りをする人を多く見るが、今回の場合、一人もそのような人がいなかったことだけでも、充実した3時間余りであったと満足している。後日、何人かからお礼の電話とあの晩、タイの悲惨さなどあれこれ考えさせられて眠れなかったと報告してくれた人がいたことを付け加えて置く。



(K. I.)

にぎやかに 新年パーティー

ゆがわら国際交流協会では、会員同士の親睦を深めようと新年パーティーを開きました。1月24日夜、会場のペンション・マンダリンハウス（鍛冶屋）には約35名の会員や家族が集い、ゲームを楽しんだり、また「やっさ国際交流」でホームステイした留学生の思い出話、自身の海外体験談などに花を咲かせ、楽しい一時を過ごしました。

● やっさ国際交流、この夏も

夏の、海外の青年達のホームステイ・プログラム「やっさ国際交流」。早いもので、七年目を迎えます。町の皆さんにも“おなじみ”となってきたのではないのでしょうか。本年は、7月28日(火)から8月4日(火)の8日間に実施を予定しております。恒例のやっさパレードにも湯河原の人達と一緒に参加します。

「外国の友達がほしいな。」「今年は、我が家もホストファミリーになってみようかしら...」とお考えのご家族、外国語ができなくても結構です。特別のもてなしをする必要もありません。普段の生活を通して私たちの文化・習慣に触れてもらい、また彼らのそれを知り、お互いの意見を交換するよい機会です。ぜひ挑戦してみてください！

詳しくは協会事務局までお問い合わせください。

tel:63-0111 湯河原町商工会内

一昨年の四月に真鶴で催された「地球民TALK'90」で講演された、リトル・ガンジーこと、アリアラトネ博士を覚えておいでですか？博士は、スリランカの農村開発運動「サルボダヤ・シュラマダナ」の代表で、多くのボランティアと共に独自の地域開発運動をされています。この二月に私たちの仲間の一人が、コロombo近郊・モラトゥワのサルボダヤ本部と農村を訪れました。

スリランカ紀行



パスポート、Tシャツ、カメラ、セッケン。最後に「気合い」をリュックに詰め込んで、旅行に出かけてゆきます。あつい、かゆい、ねむいの宿舎から逃げだし、街を歩いていると、触れること、見ることを通じて感じることは、私達との異質性です。短期間にできるだけ、この国の文化、習慣を知ろうと、いろいろ試みてみるのですが、一番単純で基本的なところで、似ているけれどやっぱり違うと感ずるようになります。例えば私達のコミュニケーションの最大の武器であった「アーユボァン」というオールマイティーの挨拶は、相手に失礼の無いようにと、微笑み合掌し、敬意、誠意を表現したつもりなのですが、彼ら（スリランカ人）のそれは「祈り」により近いものを感じさせます。つまり相手にだけ向けられるのではなく、私と貴方と共に行う行為としての礼。そう気づいてから頭の中で「神様、仏様」と念じてみるのですが、合わせた掌に力が入りすぎ、「祈り」というより、むしろ「祈願」という格好になります。「アーユボァン」と言われると、実に清らかなよい気持ちになるのは、現在では宗教的影響力の弱った社会生活の根底に、深い宗教的意識が存在しているため、身についた祈りの美しさが私に伝わる由と思われれます。もうひとつの存在として「水」があります。私達（日本人）が風景として情緒的視覚でとらえているのに対し、身体、生活、文化を全体的に包みこむ「水の力」を感じます。宗教と水、この国の美しさはそこにあります。しかしながら、その上に重くのしかかる民族対立と貧困の問題も、解決の糸口すら見出せない現実もあります。（青木 潤一）



幼稚園の子供たち
孤児も多い
（モラトゥワのサルボダヤ本部にて）

私のセンチメンタル・ジャーニー (4)

アメリカのスーパーマーケットの大きさについては、ある程度認識してはいたが、プライス・クラブというスーパーに案内してもらった時は驚いた。

まず駐車場の広さは約 800 台分のスペースがあり、オープン前から、かなりのお客さんが待機していた。どうも見たところメキシコ系の人やら、黒人系、東洋系の人かなり目立つ。(白人はほとんど見かけない)

スーパーといっても日本人が認識しているのとは異なり、小売り店を対象にした卸売りであり、メンバー制になっている。(カードがないと入れない)

そもそもオーナー(経営者)の方針は、小売り店が有利に仕入できる価格であること、メキシコ系の人にはメンバー制に関係なく、買い物ができること、大量仕入によるコストが安いこと、等々一般の店とは印象が異なり、実際に見聞して驚くことばかりだった。

まず建物の広さは日本のものと比べ、かなり広い。(2倍以上はある)

天井が高く、飾り気は全然ない。

商品は箱積みそのまま高く積まれている。商品の種類は5千種はあるとのこと。種類は数えたわけではないが、大体なんでも置いてある感じで、問題の値段はまず一番比較しやすい果物類で勘算してみると、大体日本の3分の1くらいだった。

初めから物の値段の調査の目的で見たわけではないので、適格な比較はできないが、一つの例として、フィリピンの自動車修理工場の人が、オイルを箱ごと50箱くらい買っていたが、専門工場が購入しても十分採算がとれる価格らしく、納得できたような気がした。

包装は一切なし、数量の制限はなし、価格は小売り店向き、品揃えは食料品から電気製品、車関係の部品、タイヤ(タイヤの取り替えは別棟に工場がある)肉類、米、酒類、衣類、その他何でも揃っている。

日本ではダイエーがハイパー(超大スーパー)として、この手の計画があると聞いているが、お客側としては、袋のサービスもないし、空き箱に自分で入れて、レジでは殆どがクレジット・カードか小切手を使っている。

ズホンの後ろのポケットから財布を出して、現金を出そうとしたら厳しく注意された。絶対にキャッシュは使わないこと、必ずと言っていいほど事故にあうそうだ。

その点は日本の方が安全度は高いが、物価の違いは大きく、何故日本の商品が安くないか、経済評論家の言う流通システムの問題もあるだろうが、お客側のサービスの考え方にも大いに原因がありそうだ。

サービスはまず価格から問われるべきで、包装やニコニコのサービスではない。

アメリカ人の無愛想な態度では日本人は我慢ができないだろうが、これもカルチャーの違いで、慣れてしまえばあまり気にならないらしい。

出口のところで、店の人が全部買い物のチェックをするのには、いささか引っ掛かるものが有ったが、日本では有り得ない風景だった。しかし、例えばレジャー向きの靴をチェックして、いい買い物をしたな、俺もほしいな、と気軽にジョークを言われて、ほっとしたのも事実だ。

今回は南部ミシシッピー河沿いにあるニューオリンズ市の素晴らしい思い出を報告したい。

(石井宏樹)